

語りの起源としての〈母なるもの〉という言説
『鬼平犯科帳』の「浅草・御麿^{お うまや が し}河岸」と「老盗の夢」

難波江 和 英

The Discourse of Motherhood as the Origin of the Narrative
“Oumaya Riverbank in Asakusa” and “An Elderly Burglar’s Dream” in *The Case Files of Onibei*

NABAE Kazuhide

要 旨

本稿は池波正太郎（1923-1990）による『鬼平犯科帳』の最初期の二篇、「浅草・御厩河岸」(1967)と「老盗の夢」(1968)に着目し、『鬼平』シリーズの端緒には、〈母なるもの〉という言説が作者の動因＝語りの起源として働いていることを論証する。ここで〈母なるもの〉と言うのは、我々がそこから生まれ、それによって支えられ、そこへ帰っていく、人間存在の根源という意味である。

「浅草・御厩河岸」では、元盗賊の岩五郎が二種類の父性原理に引き裂かれている。第一は、現在その密偵を務めている盗賊改方とうぞくあらためかたの父性原理、第二は、首領・海老坂の与兵衛が率いる盗賊一味のそれである。このダブルバインドに囚われた岩五郎は、家族もろとも江戸を離れ、最後には、自分を亡き母のように包んでくれる越中（富山）の故郷へ向かったように描かれている。ここには、父性原理の闘争から逃れ、母性原理の象徴としての〈母なるもの〉に憧れる主人公が認められる。「老盗の夢」では、やはり元盗賊の喜之助が、「相撲小町」と呼ばれた亡き母を思わせる三人の大女に魅せられている。喜之助の人生航路は、この三人の女によって開かれ導かれるが、その結果、喜之助は落命し、母の心象（*imago*）、つまり〈母なるもの〉に包まれる。

これらの観点から見れば、「浅草・御厩河岸」と「老盗の夢」は不連続の物語でありながら、〈母なるもの〉の神話への作者の信仰に深く根差した二つの変奏として「ひと繋がり」に読まれるべき同一の構造を備えていたと言える。

キーワード：母なるもの、動因、起源、母性原理、父性原理

Abstract

This article focuses on two of the first short stories from *The Case Files of Onihei* by Shotaro Ikenami (1923-1990), “Oumaya Riverbank in Asakusa” (1967) and “An Elderly Burglar’s Dream” (1968), and aims to show that the discourse of motherhood serves as both the motive of the author and the origin of the narrative at the nascent stage of *The Onihei* series. The notion of motherhood in this case indicates the root of human existence from which we emerge, by which we are supported, and to which we return.

In “Oumaya Riverbank,” the main figure named Iwagoro, an ex-burglar, is torn between two types of paternal principles, one being those of the Special Operation Forces he now belongs to as a spy, and the other being those of a group of burglars led by the boss, Ebisaka-no-Yohei. Caught in this double-bind, Iwagoro ends up leaving Edo with his family for, most probably, his hometown in Ecchu (Toyama), which is expected to embrace him as securely as his dead mother. From here arises his aspiration for maternal principles of motherhood following his flight from the conflict of paternal principles. In “An Elderly Burglar’s Dream,” the major character named Kinosuke, another ex-burglar, is attracted to three women of large build all of whom resemble his deceased mother, who was once nicknamed “Sumo-wrestling beauty.” The passage of his life is opened and guided by these three women until he is consequently thrown into ruin and enshrined in the *imago* of his own mother, in other words, motherhood.

Seen from these perspectives, it can be said that both “Oumaya Riverbank in Asakusa” and “An Elderly Burglar’s Dream” share an identical structure so deeply rooted in the author’s belief in the myth of motherhood that they should be read as sequential variants, though they feature unrelated stories.

Keywords: motherhood, motive, origin, maternal principles, paternal principles

序 『鬼平犯科帳』シリーズ誕生の動因

池波正太郎（1923-1990）は67年にわたる生涯で、『鬼平犯科帳』、『剣客商売』、『仕掛人・藤枝梅安』という時代劇を彩る三大シリーズを残した。初出は『鬼平』が「オール讀物」、『剣客商売』が「小説新潮」、『梅安』が「小説現代」である。この中でもっとも早く、もっとも長く連載されたのは『鬼平』で、その期間は1967年から1990年、作者が44歳から逝去するまでの延べ23年に及んでいる。『剣客商売』は1972年から1989年、『梅安』は1972年から1990年まで連載されたから、作者は1972年以降の17～18年間、三大シリーズを並行して書き続けたことになる。それだけでも、まさに「偉業」と言うしかない。

ここで着目したいのは三大シリーズの始まり、つまり『鬼平』の最初期で、物語の流れがそこから生まれ、それによって支えられ、そこへ回帰する源となった作者の動因（motive）である。その手がかりになるのが、サブタイトルに挙げた「浅草・御厩河岸」と「老盗の夢」という二篇にほかならない。これらは『完本池波正太郎大成』全30巻、別巻1巻（1998-2001）では『鬼平犯科帳』全4巻の第1巻に、そして『〔決定版〕鬼平犯科帳』全24巻（2016-2017）でも第1巻に収められている。「完本」も「決定版」も、1974年から1994年にかけて刊行された文春文庫版『鬼平犯科帳』全24巻を底本としているため、全135話の順序も同じである。その並びは「オール讀物」の初出に基づいているが、上記の「浅草・御厩河岸」だけ例外になっている。これには『鬼平』シリーズが生まれた経緯が関わっているため、少し説明を要する。

池波は『決闘・鬼平犯科帳』（1970）の「口上」（11-13）で回顧しているとおり、江戸幕府が寛文5年（1665年）10月に設けた盗賊^{とうぞくあらためかた}改方（現在なら警視庁特殊部隊）という役所の長官に興味をもっていた。たとえば、徳山^{とくのやま}五兵衛、中山勘解由^{かげゆ}、太田運八郎、そして長谷川平蔵である。この中から、池波は江戸中期の大盗・日本左衛門を追った五兵衛をモデルに選んで、1959年に「秘図」という短編を発表した¹⁾。さらに見逃せないのは、それとともに作者に新たな意欲が湧き始めたことである。「そのうちに、ぜひとも、長谷川平蔵を書いてみたい」（池波、1970、13）。この夢が最初に短編の形を取ったのは「江戸怪盗記」と「看板」である。前者は「週刊新潮」（1964年1月6日号）、後者は「別冊小説新潮」（1965年7月号）に掲載され、1968年1月には『につぼん怪盗伝』と題された単行本に（「看板」は「白波看板」と改題され）収録された。しかしどちらの短編でも平蔵の出番はほとんどなく、それどころか「看板」では、平蔵は寛政7年（1795年）5月20日に心臓発作で「急死」（池波、1965、153）している。「看板」の初出から2年5ヶ月、池波は「オール讀物」の1967年12月号で、改めて（おそらく満を持して）平蔵の物語を世に問うた。それこそ「浅草・御厩河岸」である。

但しこの一編でも、平蔵が出てくるのは最後の数ページ、中心人物は元盗賊で現在は「豆岩」という居酒屋の亭主でありながら、平蔵配下の与力・佐嶋忠助^{ちゅうすけ}のもとで密偵を務めている岩五郎である。それでもこれが好評だったため、平蔵を主人公にした物語は「オール讀物」の翌号（1968年1月号）から連載されることになった²⁾。こうして『鬼平』シリーズは生まれた。

それゆえ厳密には、「浅草・御厩河岸」は『鬼平』シリーズと言えないわけだが、「江戸怪盗記」や「看板」と異なり、全集には組みこまれることになった³⁾。そこから見ても、これは『鬼平』誕生のプレリュードと呼ぶにふさわしい一篇と言える。問題はそれが収録された位置である。

『〔決定版〕鬼平犯科帳』の第1巻で最初の8話を辿れば、「唾の十蔵」、「本所・桜屋敷」、「^ち血頭の丹兵衛」、「浅草・御厩河岸」、「老盗の夢」、「暗剣白梅香」、「座頭と猿」、「むかしの女」となっている。これらは「浅草・御厩河岸」を除き、「オール讀物」の1968年1月号から7月号にかけて、毎月この順序で掲載された。「浅草・御厩河岸」の初出は前年12月号だから、他の7話より前になるが、『鬼平』が全集化されたときには見てのとおり、第3話の「血頭の丹兵衛」（1968年3月号）と第5話の「老盗の夢」（同年4月号）の間に置かれている。「浅草・御厩河岸」は単発の書き物として構想されたこともあり、これを『鬼平』シリーズの冒頭に置くとやや唐突という印象は拭えない。そもそも、この物語では平蔵はすでに盗賊改方の長官になっており、事の経緯がわかりにくい。そこでシリーズの第1話にあたる「唾の十蔵」を見てみると、時代は「天明七年」（1787年）、「九月十九日」に四百石の旗本・長谷川平蔵が（実在した人物と同じく）42歳で盗賊改方の長官として赴任したと記されている（32）。他方、「浅草・御厩河岸」の舞台は「寛政元年」（1789年）の夏から秋にかけて、つまり平蔵が要職に就いてすでに2年ほど経っている計算だから、この物語を「唾の十蔵」より前に置くのは時系列からも不自然である。それでは「浅草・御厩河岸」をシリーズのどこに挿入するか。文藝春秋の編集部が決めた位置は、さきほど説明したとおりである。

そのプロセスで何が起こったか、詳細はわからないが、もっともわかりやすい基準はやはり物語の時系列である。第1話の「唾の十蔵」は「天明七年」（1787年）の「九月十九日」から「半月」（34）ほど経ったあたり。第2話の「本所・桜屋敷」は翌年の「天明八年」（1788年）、「小正月もすぎた」（58）ころから桜が咲き誇る「春」（103）まで。第3話の「血頭の丹兵衛」も天明8年（1788年）、第2話より進んで「十月二日」（110）から10日余り。第5話の「老盗の夢」は、第3話から「年を越して二カ月」（191）ということなので、天明9年=寛政元年（1789年）2月頃から「初夏」（205）を抜け「十二月十三日」（219）まで。それでは「浅草・御厩河岸」はどうかと言えば、すでに見たとおり「寛政元年」（1789年）の夏から秋にかけて、つまり「血頭の丹兵衛」の事件から10～11ヶ月後、それに続く「老盗の夢」の事件より1～2ヶ月前という設定なので、まさに両者の間。その結果、『鬼平』シリーズでは「血頭の丹兵衛」は第3話、「浅草・御厩河岸」が第4話、そして「老盗の夢」が第5話という並びになったと考えられる。

それでは、これら3作を物語の内容から見ればどうだろう。『鬼平』シリーズでは、通常はそれぞれの物語が独立している。しかし「血頭の丹兵衛」では、事件は解決したものの、結末に至って、盗賊から密偵になった小房こぶさのくめはち八のある心残りが尾を引き、ややオープンエンディングになっている。それを引き継ぎながら、時系列からも物語の流れからも、その後日談として展開していくのが「老盗の夢」である。それゆえ、この2作は「ひと繋がり」に読まれるべきものである。ところが『鬼平』の全集化に伴って、その間に「浅草・御厩河岸」が挟まれたわけだから、読者は少し戸惑いを覚える。しかしそこには、その違和感を補ってあまりある、別種の連続性が隠されているように思われる。「浅草・御厩河岸」の一篇が全135話にわたる語

りの起源として、作者の人間存在に深く根差した動因を宿しているばかりか、それを「老盜の夢」にも貫流させていると考えられるからである。それをここでは〈母なるもの〉と呼んでおくことにしよう。

但し〈母なるもの〉と言っても、池波の母・鈴（1902-1986）のことを指しているわけではない。なるほど作者自身、『池波正太郎』や『青春忘れもの』という自伝エッセイでも鈴の思い出を書いているが⁴⁾、この論考はテキスト分析を軸にしたクリティークである。それゆえ、ここで〈母なるもの〉と呼んでいるのは、もっと広義で普遍性を備えたものであり、言わば、我々がそこから生まれ、それに支えられ、そこへ戻るところ、あるいはそういう存在を象徴するものにほかならない。その類例でもっともスケールが大きいのは、たとえばエジプトのイシス（豊穡の女神）やギリシャのガイア（大地の女神）に代表される神話の神々だろう。さらに、神話はもとより民話や御伽話からも、人類の集合無意識に潜んでいると考えられる〈母なるもの〉を原型（archetype）として取り出し、「グレート・マザー」と呼んだのはユングである。ユング派の心理学者・河合隼雄は、その後継者として〈母なるもの〉の特性を「包む」こと、〈父なるもの〉の特性を「切る」ことに求めると同時に（164）、「ヘンデルとグレーテル」の魔女や日本の昔話に出てくる山姥、仏教の説話に現れる鬼子母に〈母なるもの〉の二面性、つまり創造と破壊の両義性を認めている（159-160）。

そこから宗教に目を転じれば、仏教で〈母なるもの〉を体現しているのは、白衣をまとい純水（蓮華の花を咲かせる妙薬）の入った壺を手にし、子を見守るという慈母観音だろう。キリスト教では聖母マリアが、イエスの遺体を抱くピエタの図を介して〈母なるもの〉の哀れみと慰めを伝えている。カトリック作家の遠藤周作はそれを踏まえ、「母なるもの」という短編で隠れキリシタンをテーマに、日本の風土によって変容したマリア像を「乳飲子をだいた農婦の絵」（263）に見出し、そこに「日本の宗教の本質的なものである、母への思慕」（264）を見ている。この短編の初出は「新潮」の1969年1月号、かたや「浅草・御厩河岸」と「老盜の夢」の初出はそれより少し前、「オール讀物」の1967年12月号と1968年4月号だから、池波と遠藤は1960年代末の同時代作家として、日本人に特有の〈母なるもの⁵⁾を探りあてようとしていたと言えるだろう。

遠藤にとって、「乳飲子をだいた農婦の絵」に象徴された〈母なるもの〉は「長い年月の間に日本のかくれたち〔隠れキリシタンたち〕のなかでいつか身につかぬすべてのものを棄てさり」（ibid.）、そのあとに残されることになった土着性の形相（eidos）である。他方、池波の〈母なるもの〉も、それをそのものとして語ることはできないが、それから逸脱、放浪、漂流した者を、その果てに迎え入れてくれるもの、あるいは場（topos）である。高橋英夫は『母なるもの』で、そうした何かを「存在の原形の場所」（230）と呼んでいるが、池波の〈母なるもの〉は、神話の女神や「グレート・マザー」のように大仰なものでないのはもちろん、どんな用語より「人の根っこ」という言葉がふさわしい。それどころか、もっと簡単に「ふるさと」とひらがなで書くべきかもしれない。それは観音菩薩の変身のように、実際の故郷として現れることもあれば、亡き母として浮かんでくることもある。

そこで改めて注目したいのは、『鬼平』シリーズ誕生の起点となった「浅草・御厩河岸」に、

〈母なるもの〉への池波の信仰が溢れていたことである。さらに、それから4作後に発表されながら、シリーズでは物語の時系列からその直後に置かれることになった「老盗の夢」にも、やはり同種の〈母なるもの〉への信仰が形を変えて現れていたことである。つまり「浅草・御厩河岸」と「老盗の夢」は、「オール讀物」に相前後して発表されたわけでもなく、物語の内容も不連続であるにもかかわらず、その観点から見れば、シリーズの順序どおり、〈母なるもの〉をモチーフにした二つの変奏 (variations) として「ひと繋がり」に読まれるべき同一の構造を備えていたことになる。『鬼平』シリーズの端緒には、〈母なるもの〉への池波の信仰が、それほど根強く、執筆の動因として、さらに語りの起源としてあったと思われる。

野村恵子は「池波文学の母親の不在」という論文で、『鬼平』も「母の不在」の作品であると指摘しているが(100-101、105-107)、それゆえ『鬼平』は〈母なるもの〉の文学になりえたとと言える。たしかに、母のない子にとって「自分の人生を選ぶためには、『母の不在』は不可欠な要件であった」(野村、104) だろうが、母のない子はそれゆえ、「自分の人生を選ぶ」ことを可能にした「母の不在」を埋めるように〈母なるもの〉に憧れると言ってもよい。〈母なるもの〉の現れは、池波にとって、「母の不在」から発した逆説の祈りだったからである。これから「浅草・御厩河岸」と「老盗の夢」をもとに論証していこうと思うのは、まさにそのことである。

I 「浅草・御厩河岸」の〈母なるもの〉～その創造性～

「浅草・御厩河岸」の物語は、人間が生きていく上でもっとも大切なものは何かを問うて、『鬼平』シリーズの先駆けになっているという点で特筆に値する。そこでは、盗賊改方と盗賊一味が、善悪の覇権を争ってせめぎ合っている。その間に挟まれて苦悩するのが主人公の岩五郎、普段は家業の居酒屋を女房のお勝に任せ、自分は葎よしず簧ば張りの店を出して草履や大福餅を売っている。お勝は「品川の宿場女郎あがり」(150)で、宇吉という子と盲目の母・お八百を伴って岩五郎と一緒に、おじゅんという子ももうけている。そんな暮らしに異変が起こるのは、岩五郎が元盗賊の「狗」(175)、つまり「盗賊あがりの密偵」という自己矛盾を孕んだ存在だったからである。

物語は寛政元年(1789年)の夏、乞食坊主がよろめきながら岩五郎の店へやってきて、水を求めるところから始まる。岩五郎が水ばかりか銭まで与えたところ、相手はそれを懐へ入れたかと思うと、なんと人相占いを始めるではないか。「長生きの運命がついとる」(151)。その気迫に押された岩五郎をよそに、乞食坊主は岩五郎の行く末を決める予言を連発する。「お前さん、おかみさんのいいのをもらいなすったね。その、おかみさんが福をもって来た」、「ただし、迷っちゃあいけないよ」、「いまの暮しのま盤とになっていることに、そむいちゃあいけない」(152)。しかし岩五郎はよくわからないまま、夜更けに店を閉め、夫婦で「行水」を浴び「仲よく寝酒」をやる(154)。お八百は夜中に目覚めたものの、岩五郎に茶を入れてもらって「うれしげに息子夫婦へはなしかける」(ibid.)。おじゅんは「健康な寝息をたてている」、岩五郎は12歳で奉公に出た宇吉のことを「心配する」、お勝はそれを「よろこぶ」(ibid.)。この一連の情景を踏まえて語り手は言う、これは「乞食坊主の指摘そのもの」(ibid.)ではないか。岩

五郎が訝った「いまの暮しの基盤」(152)は、ここに秘められているのではないか。この「庶民団欒の図」(154)を崩さないこと。それはつまり、女房^{かなめ}を要とした家庭の調和と家族の安らぎ、ひいては、ありふれた日常を根底から支え、可能にする原理としての〈母なるもの〉を守ることにはかならない。それでは、岩五郎はそもそもどのようにして「いまの暮し」へ辿り着いたのか。これまでの「生い立ち」(158)から、その人となり^{ひとなり}が形成されたプロセスを見ておこう。

岩五郎の父・卯三郎は盗賊で、母・おまきは亭主を薬の行商人と信じて家を支えたが、岩五郎が8歳のとき病死。父はそれを機に盗賊の首領として独立し、岩五郎は9歳で線香問屋・醒井屋^{さめがいや}へ奉公に出るが、店の全員から疎まれ、16歳のとき、集金した15余両を奪って無頼の道へ入り、品川宿で女郎をしていた6歳上のお勝と出会う。当時の岩五郎にとって、お勝は「姉でもあり母でもあり、さらに恋人でもあった」(162)という。見方を変えれば、それは岩五郎が「弟にも息子にも、さらに恋人にもなれた」ことを示唆している。その意味でお勝は、岩五郎に男としての存在の根柢を三重に与えてくれる女性性を備えていたと言える。しかしその恩恵も束の間、18歳で父と再会して人生は暗転する。岩五郎は父とともに、奉公時代の怨みを晴らそうと醒井屋へ押しこんで140余両を盗んだからである。

それから父子は盗賊の首領^{いすか}・鶯の喜左衛門配下に入ったが、仲間が捕まり、その自白から盗賊改方に全員捕縛されてしまう。しかし岩五郎は与力の佐嶋に見こまれ、「中風の親父と共に死にたいか。それともお上の御用にはたらき生きのびたいか？」(177)と選択肢を与えられる。岩五郎が密偵になったのは、牢内の父を見過ごしにできなかったこともあるが、このときの佐嶋の「誠意」と「情熱」に打たれたからである(176)。憂き目を見たのは、岩五郎に見捨てられたお勝である。その3年後、彼女は大工の弥吉の女房になって宇吉を産む。しかしまもなく夫が亡くなり、母と子連れ、また元の道へ戻った34歳頃、28歳になった岩五郎と品川宿で再会する。岩五郎は「[狗]としての探索に便利」(178)と考え、それを機にお勝といまの家業を始めた。しかし語り手によれば、実際の二人の暮らしには、そんな損得勘定を超えたものが広がっていたという。それは「苦労をしつくしたもの同士がたどりついた団欒」(171)である。

醒井屋での奉公時代、岩五郎には「身よりの者」も「帰って行く家」も「待っていてくれる人」もいなかった(161)。35歳になったいまでも、病身の父こそ生きているが、母は27年前に亡くなり、兄弟姉妹もない。そんな岩五郎にとって、お勝はやはり「姉」であり「母」であり、そしていまや「恋人」ではなく「妻」であり、「帰って行く家」であり「待っていてくれる人」である。お勝の女性性は、こうして〈母なるもの〉の属性を帯び始める。しかも語り手はここで、現在の岩五郎には幼少時代に深く刻まれた「団欒」の心象(imago)が潜んでいることを伝える。「岩五郎の脳裏には、高岡の町の小さな家で旅から帰って来たときの父と母の、いかにも仲むつまじい団欒があざやかに、強烈にしみついている」(163)。あの乞食坊主が発した岩五郎の「いまの暮しの基盤」は、30余年前のこのシーンに埋めこまれていたと言えるだろう。

「高岡の町」とは、父・卯三郎が生まれ育ち、女房のおまきと幼児の岩五郎を住ませ、盗賊として旅に出ていく家があった「越中・伏木」^{かしくき}(158)(現在の富山県)の城下町である。岩

五郎はそこでの思い出をお勝に語り聞かせながら、「いまの暮しの基盤」にあたる原風景を浮かびあがらせる。

「おれが故郷じゃあね、しんこ^{どじょう}泥鰌^{どじょう}って、小ゆびほどの小せえ泥鰌がとれる。父ちゃん、こいつを鍋へ入れてね、ごぼうをこう細く切って、味噌の汁をつくるのがうめえのさ。大きい鍋にいっぱいこしらえてよ。おっ母と三人で、ふうふういいながら何杯も汁をすするんだ」(163)

岩五郎にとって、これこそ「庶民団欒の図」の起源にはかならない。それは「故郷－父－母－子－共食」という言説から構成され、その要には、岩五郎の「おっ母と三人」という表現から窺えるように、いつも身を寄せ合える母がいる。それゆえこの団欒には、河合隼雄の表現を借りれば、「そこに在る限り絶対に安全な場所であり、安らぎを与えてくれる場所」(155)として〈母なるもの〉が溢れている。さらに高橋英夫が指摘しているように、「母なるものの強さはその深さ、始原性にある」(237)とすれば、両親と泥鰌鍋を囲んだひとときは、岩五郎にとって、まさに「人の根っこ」と呼ぶべき「深さ、始原性」を備えてもいただろう。「浅草・御厩河岸」の世界は、これから見るとおり、この満ち足りた時空に広がった〈母なるもの〉を源泉として始まり、それに支えられ、そこへ回帰していく。

高岡で幼少の岩五郎を包んだ〈母なるもの〉は、それから30余年の歳月を経て、お勝と分かち合う「苦勞をしつとしたもの同士がたどりついた団欒」に蘇っている。それを揺るがしたのは、商いの外回りに出た岩五郎を見かけた昔なじみ、彦蔵という老盗である。このとき「うめえ仕事」をもちかけられた岩五郎が「乗るともさ」と即答したのは、盗賊改方の密偵としての条件反射だったろう(157)。彦蔵は岩五郎の正体を疑うこともなく、首領・海老坂の与兵衛の家へ案内する。予想外だったのはこの首領で、岩五郎が会ってみると「親子三代にわたる盗賊界の名門」(165)、「うわさにたがわぬ立派なお人」(169)である。与兵衛曰く、「盗む者も泣きを見ず、盗まれる者も泣きを見ず」(166)、「手下の者のすべての身になって、おつとめをするのでなくては頭領の値打ちなし」(180)。「^{ぼたらき}急ぎ盗」(「血頭の丹兵衛」110、129)が横行している世の中で、いまでも「大盗賊の〔理想〕」(「浅草・御厩河岸」166)を掲げている。さらに与兵衛は、年配の手下には「身をかためさせ」(ibid.)、「あのお頭のおかげで、おれたち仲間がどれほど豊の上で死ねたかもしれやあしねえ」(167)と彦蔵に言わせるほど、配下の者から慕われてもいる。

岩五郎もやがて与兵衛の「巨賊の風格」と「度量の大きさ」に魅せられ、お勝さえ気づくほど翳りを見せ始める(170)。「どうも変だ。うちの人、なにか心配事でもあるのかしら…？」(171)。たしかに、岩五郎は遅くともこのタイミングで、与兵衛のことを盗賊改方へ伝えるべきだった。分岐点になったのは「寛政元年八月(現代の九月)下旬の或る日」(172)、というのも、与力の佐嶋が「海老坂の与兵衛が江戸にいるという」(179)と語りかけたとき、岩五郎は黙ったままだったからである。このとき、岩五郎の佐嶋への忠誠は、すでに与兵衛への心酔へ傾いている。そこに認められるパワーバランスは、二種類の相反する父性原理がぶつかる

「闘争の場」(agon)の様相を呈している。つまり、世間から悪を除き、秩序を守ろうとする組織(盗賊改方)の規律と、それを打ち破り、世間を混沌に陥れようとする組織(盗賊一味)の規律である。それでも岩五郎が「われを忘れ」(180)、後者へ「深入り」(181)したのは、「大親分」の人間性や「真の大仕事」の醍醐味に感じ入り、「盗賊としての血」という言説が息を吹き返したからである(182)。

それでは、この誘惑を抑えこんで、岩五郎に密偵としての「われ」を取り戻させる契機になったものはなんだったのだろう。そのヒントになるのは、逆説めいて聞こえるが、首領の与兵衛が「配下を信ずること鉄のごとし」という信念をもち、岩五郎にさえ「一点のうたがいがい」も抱いていなかったことである(ibid.)。それが与兵衛をひとかどの人物にしているとすれば、同様のことが与力の佐嶋にも言えるのではないか。佐嶋も岩五郎の人となりに全幅の信頼を寄せ、やはり与兵衛のように「配下を信ずること鉄のごとし」という思いで、岩五郎を密偵にしたのではなかったか。池波は読者にそう読むよう、語り手のナレーションに工夫を凝らしている。というのも、岩五郎は「配下を信ずること鉄のごとし」という与兵衛の信念を思い浮かべながら、それに続いてすぐ、佐嶋の人を見抜く「眼」を思い起こし「もう、いけねえ」と観念したように描かれているからである(ibid.)。

振り返ってみれば、佐嶋が「海老坂の与兵衛が江戸にいるという」と岩五郎に伝えたとき、岩五郎はすでに試されていたのではなかったか。「佐嶋さまは、おれのしていることをお見通しなのかも知れねえ。あのお人の眼はごまかせねえ」(182-183)。これはおそらく岩五郎の怯えの産物、つまり思い過ぎだったろう。しかし岩五郎が「夢がさめたようなおもい」(182)に駆られ、密偵としての「われ」を取り戻したのは、その錯覚を引き起こした佐嶋の「眼」に浮かんだ信頼の強さゆえである。佐嶋が信じたのは、この幻想とも言える人間同士の信頼を現実のものとして受けとめる岩五郎の感性だったのかもしれない。それは、もう一箇所、別のシーンからも読み取れる。父・卯三郎がいまの自分のことを知ったらどう思うか、その答えを岩五郎が想像した場面である。「とんでもねえ。お前は佐嶋さまの眼を節穴だと思っているのか…どうか、やめてくれ、よいよいになったおれはともかく、お前の首が飛んだら、女房子はどうするのだ」(181)。これはもちろん実際の父の声ではなく、岩五郎の自我を監視している超自我(superego)の声である。ミッシェル・フーコーの『監獄の誕生』の発想をなぞって言えば、岩五郎もまた、一望監視施設の独房に入れられた囚人と同じく、守衛役の佐嶋に見られているという意識だけで自己を金縛りにしたのである。

さらに注目すべきは、岩五郎が想像した卯三郎のメッセージに、佐嶋とは別の、ある意味もっと重要な存在が浮かんでいたことだろう。そう、岩五郎が守るべき「女房子」である。岩五郎の超自我が生み出した、この妻子の心象(imago)には、家族との「いまの暮し」をなんとしても存続させようとする男の倫理が息づいている。岩五郎があの乞食坊主の予言を改めて気にかける瞬間は、そこから訪れる。「あの坊さんは、おれの、いまの暮しのもとになっていることへ、そむいちゃあならねえといいなすった」(183)。岩五郎は生きながらえなければならぬ、それも「女房子」を生きながらえさせるために。もとを辿れば、それを可能にしてくれたのは佐嶋にほかならない。それゆえ、語り手は岩五郎の内面をなぞると同時に、岩五郎を

戒めるように言う。「いったんは父親ともども死罪になるところを助けられたということは、重大なことであった」(ibid.)。それを肝に銘じ「いまの暮しの基盤」を守り抜くこと。語り手はここでも、岩五郎の代弁者と懲戒者を兼ねながら、岩五郎の進むべき道を提示する。「その基礎というのは、あくまで〔狗〕となって公儀のおために働くことなのだ」(ibid.)。なぜなら、岩五郎はそれを介し「おのれのみか、現在では、お勝やお八百、子供たちの運命までも背負っている」(ibid.) からである。佐嶋からの信頼を裏切ることなく、盗賊改方の「狗」として働くこと、それによって「お勝やお八百、子供たちの運命」を背負うこと。この論理は、父性原理に支えられた盗賊改方に仕えることによって、母性原理に支えられた家庭や家族を守ることとも解せるだろう。

盗賊改方のミッションは、善悪を区分し、悪を排除することである。そこには「選別」と「切断」という父性原理の特性が認められる。しかしそれによって悪を消せば、その反価値としての善も消える。善悪は対立しているように見えて、それほど相補関係にある。盗賊一味がやはり父性原理に従って善悪を区分し、善の排除＝悪の拡散をねらっているのと異なり、盗賊改方は結局、善悪がそろって消え去る地平をめざしている。平蔵も第5巻の「鈍牛」で喝破しているとおり、盗賊改方の「御役目」は「善と悪との境目にある」からである(350)。その狭間から善悪の彼岸を夢見ること、それは善と悪が未分化でありながら、そこから善と悪が生成される母胎へ帰るといふ言説を生きることに等しい。その意味で、岩五郎が「公儀のおために働くこと」は、無意識のレベルで、盗賊改方の「選別」と「切断」という父性原理を介し、善悪のボーダーラインを消すことによって、家庭の「存続」と家族の「連帯」という母性原理を導くことに通じている。そこには、父性原理を母性原理より優先する近代と異なり、父性原理を介して母性原理を守るといふ点で、前近代の性言説が認められる。

与兵衛一味が岩五郎の「密告」(186)により捕縛されたのは、その三日後のことである。しかし翌朝、盗賊改方はある異変に気づく。岩五郎一家が卯三郎を含め「夜逃げ」(187)したのである。考えられる理由は、大別して二つあるだろう。第一に、平蔵も危惧しているとおり、与兵衛一味の6名が逃亡したため、岩五郎の「裏切り」(ibid.)がわかれば、家族もろとも消されかねないこと。第二に、岩五郎自身、与兵衛一味の仕事に最後まで加担し、密偵としての役目を疎かにしたため、盗賊改方、特に佐嶋へ顔向けできないことである。他方、当の佐嶋は平蔵へ「病身の父親を抱えての旅でありますゆえ、岩五郎を捕えるのはわけもないことですが…」(ibid.)と進言する。そのとき平蔵は「事もなげに」、「捨てておけ」と発し、「岩五郎も、よくせきのことであったのだろうよ。いままでよくはたらいてくれたほうびだ。好きにさせてやれ」と命じる(ibid.)。この平蔵のおおらかな口上には、まさに「配下を信ずること鉄のごとし」といふ与兵衛と同等の信念が脈打っている。

それと関連して忘れられないのは、物語の終盤で、佐嶋や平蔵とは別にもう一人、岩五郎の密偵としてのポテンシャルを見抜いていた人物が現れることである。父の代から下総・佐倉の浪人で、平蔵とは昔からの剣友、いまや変装して世の中を徘徊し、情報を集めては平蔵を助けている乞食坊主こと岸井左馬之助である。その左馬之助もまた、岩五郎について「あの男、これなら御役にたつ、と思いきわめたものだ」(189)と平蔵へ伝えている。この「これなら」と

は、乞食坊主の格好をした左馬之助が岩五郎に水を求めたとき、銭まで包んでくれた「彼のとりなしのあたたかさ」(ibid.)である。盗賊改方の密偵になる資格は、他者を大切に扱うこと、ひいては人間同士の信頼にあるらしい。しかしこれは同時に、与兵衛の「とりなしのあたたかさ」を思い起こさせる。というのも、与兵衛は岩五郎と最初に会ったとき、別れ際に「卯三郎どんに、みやげでも」(170)と、十両も包んでくれたからである。盗賊だった父のことまで忘れない、この首領の気遣いは、乞食坊主に施しをした岩五郎の気遣いと重なる。そんな与兵衛を、岩五郎は裏切り、盗賊改方へ売ったのである。自分の分身とも思える首領を、自分の人生のネガ(陰画)として切り捨て、お勝との団欒を自分の人生のポジ(陽画)として掬い取ること。身を引き裂かれる岩五郎のこの苦痛を癒すものはあるのだろうか。その答えは、一つのブラックボックスを開くことによって与えられる。つまり、岩五郎一家ははたしてどこへ行ったのか。

この究極の問題についても、池波は平蔵の「勘ばたらき」(第2巻「蛇の眼」11、13、第12巻「白蛇」326、第13巻「春雪」235、第15巻「赤い空」69、第18巻「おれの弟」242)を介し、改めて読者を「人の根っこ」へ誘う。「さて、岩めはどこへ行ったやら…生まれ故郷の越中を目ざしたのではあるまいか…」(188)。「生まれ故郷の越中を目ざ」すこと、それは岩五郎にとって、単に高岡へ戻ることではなく、家庭の調和や家族の安らぎを限りなく与えてくれる場所、あるいは「いまの暮しの基盤」への帰郷、つまり苦難の果てに自分を迎え入れ、包んでくれる〈母なるもの〉への里帰りを示唆していたと言うべきだろう。平蔵が岩五郎の行く末を案じ、物語の終わりに残したメッセージは、いみじくも「ふるさと」の癒しを漂わせている。そこには、幼少の岩五郎が「おっ母と三人」ではおぼった、あの泥鰌鍋の「団欒」が浮かんでいるからである。「岩五郎が、越中のどこかの町で、中風の親父と盲目の義母と、女房と子と、安穩に好きなどじょう汁をすすってくれるような身の上になってくれることだな」(190)。

平蔵がそう願ったように、はたして岩五郎一家は越中へ向かったかどうか、それはわからない。しかし池波がこの平蔵の思いを通し、現代の読者たちへ、時代を超えた、つまり非歴史化された〈母なるもの〉のかけがえのなさを伝えようとしていたことは間違いないだろう。上野千鶴子は「女装した家父長制」で、「日本文化論が非歴史化しようとしてきた『日本の母』が、どのような言説の政治のもとにあるかを知れば、それを無邪気に理想化することはできなくなる」と書いている(144)。この説に照らせば、たしかに池波は「日本の母」を「非歴史化」し「理想化」した系列に属する作家として位置づけられるだろう。しかしその作家が「浅草・御厩河岸」の物語で、〈母なるもの〉を「無邪気に」理想化したかどうか、それはまた別の問題である。8歳で母を亡くし、その「母の不在」を埋めるように〈母なるもの〉という言説を生きた寛政元年の岩五郎を、それから230年を経て21世紀を生きる誰も「無邪気に」笑うことはできないからである。

Ⅱ 「老盗の夢」の〈母なるもの〉～その破壊性～

「老盗の夢」の物語は、序で説明したとおり「浅草・御厩河岸」より前の「血頭の丹兵衛」から繋がる後日談である。タイトルの「老盗」とは、「血頭の丹兵衛」の終盤で、密偵・糸八

へ「わしは、これから京へ行く。むかしの情婦の墓参りさ」(147)と告げて去った元盗賊・^{みの}火の喜之助のことである。そこで「老盜の夢」を開くと、喜之助は京へ着いて二ヶ月、20年前に死んだお千代の墓参りへ足繁く通っている。喜之助がお千代を「情婦」にしたのは「(なにごとにつけ、お前のような女でなくては、^{つとめ}盜のことを打ちあかせぬ)ほどの、しっかりした女」(194)だったからである…というのは表向きの理由で、その裏には「^{そりむね}反胸の堂々たる体格のお千代の、あくまでも豊満な乳房や腰の^{しし}肉おき」(ibid.)への性欲望を抑えられなかった喜之助が隠れている。喜之助の人生を豊かにしたのも狂わせたのも女、正確には「大女」(202)、そして彼自身の「大女好み」(198)、「大女好みの男の血」(197)である。いまから見ていくように、これこそ、喜之助にとって〈母なるもの〉への憧れの源泉であると同時に、自分の死を招き寄せる破滅の元凶にはかならない。

喜之助は67歳という設定だから、現代の感覚からすれば「老盜」というには少し早いかもしれない。しかし喜之助の現在にあたる寛政元年(1789年)から100年余りを経て行われた寿命調査(第1回の生命表、1891-1898)でさえ、出生児の平均余命は男=42.8歳、女=44.3歳である(鬼頭、174)。但し長澤克重の「19世紀初期の庶民の生命表」によれば、「還暦近くまで生きながらえた場合は、平均的にみて七十歳を超える寿命が期待できたといえる」(224)。さらに氏家^{みきと}幹人の『江戸人の老い』からもわかるとおり(19-21)、もっと長命の人もあったわけだが、寛政元年で67歳と言え、やはり「老人」の部類に入る。

それと同時に、「老人」という言説がむしろ人を年寄りにするのか、喜之助も「めっきり老けこんだ心細さ」と「楽隠居の安逸さ」の混淆を「古びた肉体とこころ」で味わうように日々を送り、「京へ骨を埋めるのもいいだろうよ」とさえ思っている(192)。ところが、そんな気楽な日常をひっくり返してしまう出来事が起こる。「その日…あの場所で…」、「その女を見ることがなかったら、喜之助の余生は、おだやかな衰弱のままに身をゆだね、何事もなく朽ち果てていったことであろう」(ibid.)。たしかに語り手が言うとおりに、喜之助の老化を遅らせたのは「あの女」である。しかし喜之助の寿命を縮めたのも、やはり「あの女」だった。もっと正確に言えば、実在した「あの女」というより、「あの女」の〈母なるもの〉に秘められた、創造と破壊の両義性を帯びた力ということになるだろう。

語り手が言及した「その日」・「あの場所」とは、喜之助がいつものようにお千代の墓参りを終えた夕暮れ、一乗寺村へくだる坂道に出たところである。なんと眼前を「^{ふと}肥り肉の^{じし}大女」(194)が通り過ぎていくではないか。しかも「お千代そっくり」、それに驚いて足を挫き、うめき声を発した喜之助に駆け寄ったときの「肥体に似合わぬ、その敏捷な躰のこなし」も「お千代そのもの」(ibid.)。「あたたかい女の手」、「大女だが、若さにみなぎっている可愛いらしい顔」、「黒瞳のぱっちり、鼻も唇もほっそりとした…愛嬌たっぷりの表情のうごき」(195)。これでは「大女好み」の喜之助はひとたまりもない。

この日以降、喜之助はおとよというその女と逢瀬を重ねるようになり、外泊も含め、それまでとは「がらりと変わった」(ibid.)。その動きは、まるで性欲望の操り人形のように見えるが、喜之助はおとよを「わがもの」(198)にしたわけではない。語り手は庶民の性言説をなぞって、そう断りを入れたばかりか、その理由まで説明する。喜之助は寄る年波で、「いまさらどうな

るわけのものでもないことを充分に知悉していた」(ibid.)からである。それでも、喜之助はおとよへの「血のさわぎ」(ibid.)を抑えられない。語り手はここでも、喜之助の性欲望の高まりを「血」の慣用句に求める。江戸後期の国語学者・高橋残夢も『国語本義』に、血とは「肉尔満之灵通る之義」(肉に満ちて通る霊の意)(巻之一、二五丁オ)と記したほど、体内を巡る血の流れは、生と性に共通した力の源を連想させる。おとよに出会って1ヶ月、喜之助は「血のさわぎ」という言説がもたらした現実の効果を証明する。「老顔に花が咲いたような照り」が浮かび、老体も「筋金をはめこんだかのようにぴんしゃんとなった」(196)。喜之助にとって、「大女」のおとよが発揮するアンチエイジングの効果は、それほど絶大である。その根源にあたるものは何か、それはどこに潜んでいるのか。そう訝る読者が最初に導かれるのは、武州・蕨わらびしゅくの宿である。

「血頭の丹兵衛」では、喜之助は「にせものの丹兵衛」と思われる盗賊が江戸で荒稼ぎしていると、盗賊仲間から「真の盗賊」(121)と謳われている「ほんものの丹兵衛」のために「一肌」(145)脱ごうと、蕨の宿を発ったことになっている。それでは喜之助はなぜ、そもそもそんなところに引き籠もっていたのだろうか。それが「老盗の夢」で明らかになる。情婦のお千代が京で死んだため、喜之助は足を洗って江戸へ戻り、娘を抱えた中年の寡婦・お幸と出会って面倒を見始める。それもまた、お千代と同様「お幸がでっぷりと肥えた福々しい体格のもちぬし」(198)だったからである。このお幸の故郷が、実は蕨の宿だった。まさに well-made、よくできた話である。

喜之助はそこで宿屋をしていたが、お幸も死んだので、娘のおもんに婿を取って夫婦に宿を譲り、京へ行ってお千代の墓参りで余生を過ごそうと考えたわけである。お千代と暮らした京から江戸へ、そこからお幸の故郷・蕨の宿へ、そこから江戸を経由して再び京へ。この喜之助の人生行路は、お千代とお幸によって演出されている。そしていま、20年ぶりに舞い戻った京でも、なんと、いや、やはり「大女」(197)に魅入られた。それこそ京の郊外、愛宕郡あたごやまばなの山端にある茶屋・杉野やで働く二十歳の茶汲女・おとよだった。

急に元気になった喜之助に目を見張る周りの者たちは、その原因を語り始める。たとえば元配下の源吉は「ははあ…いい女ができなすったか」と推察し、源吉の女房・おきさは「おあそび、度がすぎぬとようござりますなあ」(196)、「どこの女ごはんどすのやろう」(197)と気を揉む。この庶民の性言説の語り口によって、おとよは「大女」から、喜之助の「おあそび」の「いい女」へ現実の輪郭を与えられる。そうして周りの者たちにとっても、おとよが喜之助の性欲望の対象に見え始めたころ、喜之助にも「あ…？」(200)と思うほど突然、おとよを「わがもの」にしようとする衝動が生まれる。そのときの語り手のナレーションは、婉曲語法(euphemism)であるため奥ゆかしく、それゆえ喜之助の狼狽を思わせるに足るほど滑稽でもある。喜之助は「われながら意外…勃然として萌しはじめたのを知ったのである」(ibid.)。さらに語り手はこれに続けて、今度はあからさまに、おとよの豊満な肉体を活写し、それに迫られた喜之助の興奮を際立たせる。「眼前に、おとよのもりあがった乳房が、この世のものではないほどの巨大さで衣服からはじきこぼれんばかりであった」、「ぷっくりとしたおとよの若い唇がわずかにひらき、白い歯の間からちらちらと紅色の舌が見える」(ibid.)。

この色っぽい語りっぷりはどうだろう。いよいよ、「大女好み」の喜之助には抵抗できない瞬間が訪れる。おとよは引き寄せられるまま、「おもしろい軀をふわふわともたせかけてきた」が、喜之助は「その重量をささえかね…横ざまに倒れた」(201)。しかし倒れながら、その手を「小山のごときふくらみを見せたおとよの腰」(ibid.)へ…喜之助にとっては緊張を強いられる山場、その瞬間のドタバタ喜劇 (slapstick)、読者は笑うしかないだろう。しかし語り手はここでも品格を保ち、あせる喜之助とは裏腹に、「そして…。万事がとどこおりなくすんでしまったのである」(ibid.)と報告する。その冷静さは、それに続く喜之助の踊りあがらばかりの喜びようをむしろ印象づける。「こ、こいつは、わしも、まんざら…」(ibid.)。おとよは「老いたわがちからの前に、ほとんど狂態に近い態をしめした」(ibid.)からである。それゆえ喜之助もまた、語り手の「わがちから」という性言説を反復しながら、「わしにも、まだ男のちからが残っていたじゃないか」(202)と自信を深める。それなら、おとよを京から江戸へ呼んで「ぜいたく」をさせてやり、自分も「あれのみごとなからだ」に溺れよう(203)。喜之助がそんなことを夢見たのは、おとよによって「若やいだちから」(202)が再生されたからである。しかしこれらはすべて、女の演技が生んだアイロニー、つまり喜之助がワクワクしている現実、おとよが仕組んだワナ=虚構の効果だったのである。

たとえば、喜之助がおとよとの別れ際に、こんなことは「五年ぶり」(201)とささやいたときにも、おとよは「あ…こないなこと、わたし、はじめて…一度にやせてしまうた…」(ibid.)と返している。これからしていかにも空々しいわけだが、おとよの「得も言われぬ嬌声」(ibid.)はさらに怪しい。はたしてそこまでなまめかしい声が、うぶに描かれてきたおとよに発せられるものか。そう勘ぐれば、喜之助のがんばりに「ほとんど狂態に近い態をしめした」おとよの「はじめて」の乱れぶりも、男が夢見る理想の女をなぞった誇張表現 (hyperbole)、あるいは戯画 (caricature) に思えてくる。

しかし喜之助の「老盗の夢」は、むしろそれゆえ、とどまることなく膨らんでいく。さっそく京から江戸へ戻り、おとよの家を見つけよう。出発前には、おとよに「小づかい」(204)として20両を与え、25日もかけて江戸へ到着。京を出るときに5両そこそこだった所持金は、いまや120余両。これはもちろん道中の「鼠盗」(205) (こそ泥) による収穫であるばかりか、「これからの大仕事への資金」(206)でもある。本音を言えば「なんととしても三百両」(ibid.)、それだけあれば、おとよと江戸で最後の夢を見られる。それも1年で充分、あとは京へ戻り、死んで、お千代の墓へ入る。そのためにも「最後のおつとめ」(208)を…ここまで喜之助の行動と計画を書き連ねてきたのは、この呑気に見える一連の流れが、おとよによって築かれた空中の楼阁だったことを明らかにするためである。つまり、喜之助はおとよという女が見ている夢の中で、「老盗の夢」を白昼夢として見ている男にすぎなかった。おとよへの性欲望に駆られ、囚われた喜之助は、まさに袋の中の「鼠」、それも、この入子式の夢の構造に進んで入っていく「鼠」だったと言える。

江戸へ戻った喜之助は「最後のおつとめ」の準備をするため、二代目・夜兎^{ようぎ}の角右衛門配下・前砂^{まえすな}の捨藏^{すてぞう}が営んでいる盗人宿を訪れ、三人の盗賊を紹介してもらう。押し入り先は四谷門外の蠟燭問屋・三徳屋^{さんとくや}治兵衛宅。この選択にも、実は女が絡んでいる。蕨の宿で同棲していた、

いまは亡きお幸が、なんと三徳屋の通い番頭をしていた伊予蔵という男の元女房だったからである。お幸は生前、病死した夫から三徳屋のことを聞いており、代々にわたり蓄積された金銀のことも含め、喜之助へ語ったことがある。そのとき喜之助はすでに盗賊をやめ、これで「量の上でしねそうだ」(215) と思っていたところだから、その気にならなかった。しかしいまや、背に腹は代えられない。「おとよ。お前とめぐり合ったがために、わしはまた、おつとめをやらなあならねえ。ほんにお前はわるい女だよ」(ibid.)。ここでも喜之助は、自ら進んで悪事に関わっているように見えて、実はおとよに遠隔操作され、その手のひらで踊らされている。それでもなお、そんな自分を抑制できない、というより、抑制できない自分を楽しんでさえいる。それどころか、喜之助は三徳屋を襲う計画が遅れそうになったため、わざわざおとよへ手紙とともに10両まで送っている。その意味で、おとよは男を意のままに操って破滅させる「運命の女」(femme fatale) という19世紀末の用語より、江戸時代にも流布していた「わるい女」という呼称のほうがよく似合う。

三徳屋への押しこみは「忠臣蔵」(218) の12月14日と決まり、その前日、喜之助は雇った三人の盗賊へ「真のおつとめの道を外してはならねえ」(220) と念押しする。しかしそんな喜之助を「むかし気質の老いぼれ」(221) と蔑んでいる手下たちは、喜之助へ飛びかかり気絶させてしまう。三徳屋の連中を皆殺しにし、奪った金を自分たちで山分けしようというわけである。かたや喜之助は物置へ放りこまれ、手足も縛られ「屈辱と激怒」(222) で気も狂わんばかり。しかし語り手は、手下たちに侮られた喜之助の「むかし気質」の弊害を、行動心理学者かと思わせる視点から解き明かしていく。語り手によれば、喜之助は「むかし鳴らした自分の貫禄」で、かつての配下の者たちを「手なづけ」たように、今回の三人の盗賊も「服従させ得る」と考えていた (ibid.)。しかし彼らはそれを逆手に取り、喜之助へ「従順」(ibid.) のフリをし、喜之助に押し入りの段取りをさせ、最後はすべてを搔っ攫ってしまうという魂胆である。自分が上手に出られるという自負から、相手を自由にできると信じこんだ男が、そこを相手につけこまれ、おだてられ、従っているフリをされ、ついにはすべてを奪い取られてしまうという流れ。

これはまさに、喜之助とおとよの関係の反復ではないか。というのも、喜之助はおとよを「わがもの」にすることで、自分の「男のちから」に自信を取り戻し、おとよの「みごとなからだ」をむさぼり続けることと、江戸での二人の暮しを夢見たからである。他方、おとよは喜之助に取り入り、その「男のちから」に身悶えするフリをし、そんなことは「はじめて」とウソまでつき、喜之助から取れるものは取ろうとしていたからである。相手をその気にさせたければ(相手を服従させたければ)、自分の欲望を相手に押しつけるのではなく(それでは自縄自縛、命取りになるので)、相手の欲望をなぞるだけでよい。このノウハウは、エドガー・アラン・ポーの短編「盗まれた手紙」で、相手の心理を読み取るには、そうしたいという自分の欲望を抑え、相手の顔の表情に自分の表情を合わせるだけでよいと教えてくれた少年を思い起こさせる。「老盗の夢」でも、三人の盗賊とおとよはそろって、喜之助の外面の動きをトレースしながら、そこから相手の内面の輪郭を透かし見て、その隙につけこんでいるからである。

それでは当の喜之助はどうかと言えば、なんとも単純に、「気どころも知れぬやつどもを寄

せあつめて、おつとめが出来るとおもいこんでいたとは、なんと恥ずかしいことだ」と事後になって振り返り、「それもこれも…あの（おとよの見事なからだをもっと思いきりなぐさんで見たいという、年甲斐もねえ夢をみたからだが…ふ、ふふ）」(225)と苦笑いするだけである。つまり喜之助にとって、手下の三人に出し抜かれたことは、もとを辿れば、おとよへ入れこんだことの反復であると同時に結果でもある。まさか三人の盗賊とおとよに、同型の行動心理のメカニズム（相手をその気にさせたければ、自分の欲望を相手に押しつけるのではなく、相手の欲望をなぞること）が働いていようとは…そしてそれが、というより、それへの無自覚が、自分の寿命を縮める元凶になろうとは…。

しかし喜之助は、あくまで自分の信念を貫こうとした頑固者、つまりフラット・キャラクターとして描かれている。「縄抜けの喜之助」(ibid.)と呼ばれたころの妙技を活かし、見張り番も倒して物置から逃れた喜之助は、三人の盗賊を追いかける。そのとき喜之助が考えていたのも、相手に従うフリをすることではなく、「掟にしたがひ、裏切った三人を成敗する」こと、それにもまして「やつらを生かしておいては、真のおつとめが汚れるばかりだ」ということだった(226)。「真のおつとめ」という言説を、怒りに任せてそれが通じない相手に突きつけること。それは喜之助にとって、おとよと交わったあとに感じた「若やいだ力」と同様、「得体の知れぬ激情」とともに「十も二十も若返ったような精気」を湧き立たせる(ibid.)。性のエネルギーと怒りのエネルギーは、喜之助にとって、人間の中にマグマのように溜まったリビドー（衝動の源泉）の暴発として、どちらも死のリスクを帯びている。それを証明するように、喜之助は三人の盗賊が立ち寄った居酒屋へ踏みこんで、二人を刺し殺し、残った岩坂の茂太郎と刺し違えて息を引き取る。性のエクスタシーばかりか、怒りの興奮もまた、人を忘我の境へ導き、自分と相手のボーダーを消して死の境を開くという好例だろう。

そうなる気にかかるのは、残されたおとよである。そのタイミングを察したかのように、語り手は「そのころ…」(232)と、読者の視線を巧みにシフトさせる。場所はやはり山端の茶屋・杉野や、しかし客はもちろん喜之助ではなく、京の三条柳馬場に店を構える松屋伊左衛門という中年男。そこでは、おとよが「巨大な乳房をもてあそばれながら」、「あ…こないなこと、わたし、はじめてどす…一度にやせてしもうた」と、どこかで聞いたセリフを繰り返している(ibid.)。しかしそのおとよもまた、喜之助からもらった20両を、瓜生山中の「美男のたくましい山伏」(ibid.)に貢いで落胆する、という憂き目に遭っている。黒滝坊というその山伏は、朽ち果てかけた不動堂を修理するなどと言って、おとよの金をもち逃げたからである。相手をその気にさせたければ、自分の欲望を相手に押しつけるのではなく、相手の欲望をなぞること。これまで喜之助を手玉に取り、いままた松屋伊左衛門に同じトラップを仕掛けているおとよも、自らの女としての性欲望については、喜之助と同様、この教えを守れなかったようである。

それではここから、最初の問題にして最後の問題へ取りかかろう。喜之助の「大女好み」の根源は、どこに潜んでいたのか。それは〈母なるもの〉とどういう関係にあったのか。そのヒントは、喜之助がおとよによって「男のちから」を確証したあと、おとよの肉体に包まれ、ゆったりしたまどろみに浸っている瞬間に描きこまれている。「おとよの双腕に抱きしめられ、ま

くわ瓜のような乳房に老顔をうめていると、喜之助は幼児の甘えさえも取り戻してくる」(202)。おとよの抱擁(母性原理)によって、喜之助には「男のちから」(父性原理)ばかりか、それとは真逆に思える「幼児の甘え」、つまり退行現象まで蘇ってくる。それを遡った読者の目線の先には、喜之助の生まれた信州・上田の造り酒屋と、自分を産み育ててくれた母の姿が浮かびあがっている。この母は名前を与えられていないからこそ、一人の女としての存在を超え、上田城下の人々から呼ばれた異名を介して〈母なるもの〉の象徴と化している。「相撲小町」(ibid.)! それも「大女」であったばかりか、「美女」でもあったという(ibid.)。8歳で母を失った「浅草・御厩河岸」の岩五郎に似て、6歳で母と死に別れた喜之助は「その顔だちの美しさ」(ibid.)をあまり覚えていない。「だが」、と語り手は力説する、「喜之助の肌がしかとのみこんでいた」ものがある(ibid.)。それは「圧倒されるほどの巨大な乳房や腰。腹の中へ自分の小さな躰が埋没するような…母の肉体のすばらしさ」(ibid.)にほかならない。

喜之助はおとよに抱擁されながら、乳幼児だった過去へ戻り、「大女好み」の根源としての母の巨体に埋もれていたわけである。それは6歳での死別という形で、あまりにも早く母と切り離された喜之助にとって、改めて母と繋がるための補償作用だったと言えるだろう。「浅草・御厩河岸」の岩五郎にとって、生まれ故郷の越中がそうであったように、退行現象を起こした喜之助には、おとよを媒介した「相撲小町」という母への帰還は、安全と安心を限りなく与えてくれる場所、すべてを包みこんでくれる故郷、つまり〈母なるもの〉への里帰りを暗示している。その観点から振り返れば、喜之助がおとよと巡り会ったことを「何かの縁」(203)と思ったのも、おとよを透かし、お幸とお千代を抜け、生前の母を見ていたからと考えられる。

京から江戸へ、江戸から蕨の宿へ、蕨の宿から江戸を経て京へ、そして京から再び江戸へ。この喜之助の旅路は、たしかに、お千代、お幸、おとよによって開かれた。しかし喜之助の中では、その流れは「相撲小町」としての母の存在から湧き立ち、これら三人の大女にそれぞれ伏流しながら、ついには母の元へ回帰していくという意味で、もっと大きな人生の軌跡を描いている。実はそれこそ、喜之助が見た「老盗の夢」だったのかもしれない。それでは喜之助の亡骸は、本人が望んだとおり、京のお千代の墓へ入ったのだろうか。はたしてそこは、喜之助にとって第二の帰るべき故郷、つまり〈母なるもの〉に包まれて眠る桃源郷になったのか、それとも喜之助を死んでも抱きしめて離さなかった〈母なるもの〉の伏魔殿となったのか。語り手は黙したままである。その創造と破壊の両義性を孕んだ沈黙から、池波文学の哀愁=情念(pathos)は生まれる。

「自分の心身の底に潜み、生きつづけている〔子供のころ〕を、私は、これからの自分の小説へ表現していきたい」(池波、1979、12)。『鬼平』シリーズの幕開けを飾るように、「浅草・御厩河岸」と「老盗の夢」を貫流した〈母なるもの〉の言説は、池波自身が毎日新聞で明かした、この1979年4月15日の夢を、それより11年ほど前にはすでに実現していたことを示している。その意味で、これらの物語は「子供のころの私の幸福な環境は、後年の波瀾あってこそ、はじめて生きたように感じられる」(ibid.)と記した作者の正夢だったと言える。池波が〈母なるもの〉を育んだのは、関東大震災で浅草の家を消失した両親と移り住んだ埼玉県だったと思われる。「浦和でのおだやかな幼児の生活が、いかに今日の自分へ大きな影響をもたらした

かを、おもわずにはいられない」、「私の一生は、この数年間で決定したといってよい」(ibid.)。池波にとって、災害で失われた浅草の家が「不在の母」であったとすれば、幼少時代を過ごした浦和の家は〈母なるもの〉を漂わせた場所、つまり「ふるさと」であった。「母の不在」を埋めるように〈母なるもの〉に憧れたのは、ほかならぬ作者自身だったわけである。

注

テキストは『〔決定版〕鬼平犯科帳』を使用する。

- 1) その後、池波は改めて、1976年から1978年にかけて、徳山五兵衛を主人公にした物語を「おとこ秘図」と題して「週刊新潮」に連載した。
- 2) 花田紀凱『池波正太郎作品集』月報(朝日新聞社、1976年)
- 3) 「江戸怪盗記」に登場する盗賊・葵小僧は『鬼平』シリーズの「妖盗葵小僧」で暗躍し、「看板」に登場する夜兎の角右衛門は(「老盗の夢」では「大仕事」(208)で広島へ出かけているという設定だが)同シリーズの「山吹屋お勝」で復活する。
- 4) 『池波正太郎』(5-6, 200-208)、『青春忘れもの』(11-23)
- 5) 山村賢明は「日本の母」について、「単なるコのおヤとしての意味を超えた存在」、内面の「よりどころ」として「正当性」、「神聖さ」、「救済力」をあわせもった存在であると論じているが、これも見方を変えれば、この論考でトピックにしている〈母なるもの〉の特性と言える(3)。

参考文献

- 池波正太郎「江戸怪盗記」、『週刊新潮』1964年1月6日号、91-102
——「看板」、『別冊小説新潮』1965年7月号、142-153
——『決闘・鬼平犯科帳』(文藝春秋、1970年)
——「子供のころ(上)」(毎日新聞、1979年4月15日)
——『につぼん怪盗伝』(立風書房、1992年)
——『作家の自伝76 池波正太郎』(日本図書センター、1998年 a)
——『完本池波正太郎大成』第4巻～7巻、『鬼平犯科帳』(講談社、1998年 b)
——『〔決定版〕鬼平犯科帳』全24巻(文藝春秋、2016～2017年)
——『青春忘れもの一増補版』(中央公論新社、2020年)
上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』(朝日新聞社、2000年)
氏家幹人『江戸人の老い』(草思社、2019年)
遠藤周作『遠藤周作全集』第6巻(新潮社、1975年)
河合隼雄、藤田統、小嶋謙四郎『どう考えるか 母なるもの』(二玄社、1979年)
鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』(講談社、2000年)
ジュリア・クリステヴァ、カトリーヌ・クレマン『〔母〕の根源を求めて—女性と聖なるもの』(光芒社、2001年)
高橋残夢『國語本義』巻之一、無刊記本、静嘉堂文庫所蔵(16547・182・86 15)
高橋英夫『母なるもの 近代文学と音楽の場所』(文藝春秋、2009年)
長澤克重「19世紀初期の庶民の生命表—狐禅寺村の人口・民政資料による—」、「立命館大学人文科学研究 所紀要」87号、2006年、215-226
野村恵子「池波文学の母親の不在」、法政大学国文学会「日本文学誌要」60巻、1999年、99-108
花田紀凱『池波正太郎作品集』月報(朝日新聞社、1976年)
山村賢明『日本人と母—文化としての母の概念についての研究—』(東洋館出版社、1984年)

(原稿受理日 2023年3月7日)